



11月号

ひだまり

今月のエッセー

崩れゆくもの



九月、帰省しました。親戚の法事があったためです。一周忌と十七回忌を同時にお勤めしました。

年忌から一週間前の日は、お隣のお婆さんの祥月命日でした。この家はお婆さんとその娘さんの二人暮らしで、特にお婆さんには、私を含めた兄弟三人はとても可愛がってもらいました。お婆さんはよくお寺に来る人でした。私も幼い頃はお婆さんのところに出かけて行き、田んぼやみかん畑につれて行ってもらったりしましたし、ボイラーが壊れて寺の風呂が使えない時はお風呂をもらいに行ったりもしました。そして何より、私の幼稚

園から高校卒業までの計十四年間、登校する私たち兄弟を、毎朝家の窓から見送ってくれたのでした。
お寺の檀信徒だったので、私はお墓に行つて線香を供えてきました。久々の帰省でしたから、直接家に伺つて仏壇に手を合わせてもいいのですが、家を一人で守っているお婆さんの娘さんは、あくせく忙しい人で気疲れするから、姉と相談して家に行くのは止めておきました。
親戚の法事が終わつて私は東京に戻りました。それから数日後、姉からメールが届きます。例のお婆さんの娘さんが亡くなったとの知らせでした。
こうしてその家は田舎に数ある住む人無き家の一つとなつたのでした。それは、その一家なしではあり得なかつた私の過去が、二度と手に触れられない遠くのものになつた瞬間でした。

生きて齢を重ねればこういう瞬間はより多く訪れ、縁あつた人や物は次第に姿を消していくのでしょう。と頭で評してみても、いつも心情は言葉の守備範囲を越えていてなんとも口惜しいものです。

◆田代浩潤

仏教のことば

挨拶

普段私たちが何気なく交わす挨拶ですが、この「挨拶」という言葉が実は修行僧の所作に由来していることをご存知でしょうか。

「挨」も「拶」も、一文字ずつだとなじみのない漢字ですが、本来「挨」という字は「押すこと」、「拶」は「せまる」という意味です。

修行道場では、お互いに問答を掛け合うことがあります。そのやりとりの中で相手の修行の進み具合を確かめ、推し量るのです。

このことを「一挨一拶」といい、現在私たちが使用している「挨拶」の語源になった言葉だと言われています。

ます。

問答といつても優劣をつけるために行うものではありません。相手の考えを知り、お互いに仏教の理解を深めようとするものです。

同じように、相手を思いやり知ろうとすることは、現代の挨拶でも大切にすべき心がけなのではないでしょうか。

「おはよう」

「お疲れさま」

「またね」

日々交わされる何気ない一言を、大切にしたいものです。

◆本田真大



編集後記

十一月を霜月と呼ぶ。様々な語源があり一般的には、霜が降りやすい時期ということで世間に広く伝わっています。

窓の外に目を向ければ辺り一面薄っすらと白っぽく、近づいてみると霜柱や水たまりには氷が張っています。その上を歩くと「シヤリ、パリ」と音を立てて割れ、さながら冬の到来を知らせる呼び鈴のような役目を担っているように思えます。その音により一層寒さを感じ、反射的に首を引つめてしまいそうになるのです。

早いもので、今年も今月と来月を残すのみ。有意義に過ごしていきたいものです。

◆伊藤正法

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四



法のお話



一年度
ふかさわりようどう
深澤亮道

子どもの教え

「諸悪莫作 衆善奉行」

(もろもろの悪いことをなすことなく、もろもろの善いことをしなさい)

昔の中国、唐時代に詩人で有名な白樂天という人がいました。若い時、鳥窠道林と呼ばれる樹の上で仙人のような生活をする和尚さんを訪ねました。

白樂天は早速、道林に「仏教の一番大事な教えとはなんですか？」と尋ねました。その時に道林は「諸悪莫作、衆善奉行」と答えました。あまりにも平凡な答えに白樂天は呆れて言い返します。

「悪いことをなさず、善いことをせよというのなら、三歳の子どもでも言えるだろう。」

う。」それに対して道林は、「三歳の子どもが言えるとしても、八十歳の人も行う事ができないであろう。」と平然と答えました。そのことにハッと気づかされた白樂天はその後道林に師事し、修行したと伝えられています。

私は最近、実家に帰省すると、甥っ子達の相手をするのが習慣となりつつあります。久しぶりの帰省だからゆっくりしたい私と、久しぶりの帰省だから相手をしなさいという家族と毎回少し言い合いになります。

(しょうがないか・・・)と重い腰をあげ一緒に遊ぶのですが、意外と楽しくなつて子どもに負けじと無邪気に遊んでしまふ私がそこにはいます。彼らからすると私はおじさんというより、同世代のいい遊び相手であり、ケンカ相手なのでしよう。しかし、私もおじさんとして彼らには少し厳しく躰を行ったりします。

「ご飯食べる時はいただきますだよ！」
「物をもらったらありがどうって言うんだよ！」

「横断歩道を渡る時は、きちんと手を繋いで手を上げるんだよ！」

少し言葉を理解するようになってきた甥っ子達は、注意されると意外と素直に言う事を聞いてくれます。私はその時とても愛おしく感じます。可愛さ余ってつい色々と教えてしまふのですが、ふと自分自身の手を振り返った時に、その教えたことを自分ができていないことが多いように感じます。

「もろもろの悪いことをすることなく、もろもろの善いことをしなさい」と言葉で言う事は簡単ですが、分かることと、行うこととはまったく別なのです。

禅の修行は日々の生活を当たり前に行うことを基本とします。朝になったら起きる。ご飯を食べる時はしっかりと手を合わせる。掃除をする。すれ違う時には挨拶をする。大切なのは普段の何気ない行いなのです。

甥っ子に色々言葉で教えるのは簡単です。しかし、それを全部行うことはなかなか難しいです。修行していた時にできていたことができていない。甥っ子達に教えているようで、実は自分が教わっていた。そんなことを感じながら日々の生活を振り返っていきたくて思ったのでした。

仏教の行事

とくどしき 得度式



「お坊さんになりたいです。」そうやってきたのは、お寺の檀家さん。なんでも事情があつて、お坊さんになりたいのだとか。

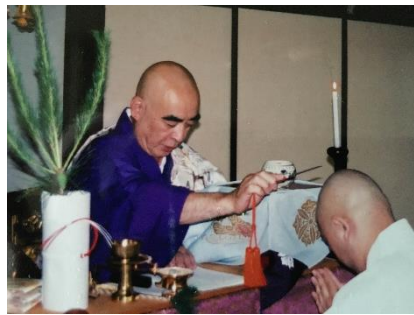
私の師匠はその旨を承諾し、得度式を執り行いました。

そう。「得度式」とは、お坊さんになるための儀式のこと。

この儀式を通して、頭髪を剃り、これからお坊さんとして生きていく覚悟を決めるのです。

私は、お寺で生まれましたが、生まれながらにしてお坊さんだったわけではなく、やはりこの得度式を通して、仏教の世界に身を投じることになりました。

このお檀家さんの話を聞いた時、私自身も一人のお坊さんとして、どう生きていけばよいのか。今一度、自身に問い直す機会となりました。



◆ 田中仁秀

ひだまり書房



愛と信念の言葉

著 ダライ・ラマ法王 14 世
写真 野町 和嘉

八十二歳の高齢にも関わらず、今もなお世界中を勢力的に巡り続けるチベット仏教最高指導者、ダライ・ラマ法王十四世。法王の語られる優しくも力強いその思いは、その一つ一つが現代に生きる私たちに「生きる」とはどういうことかを投げかけてきています。

「人生の目的は、幸せになることです。」

生きる上で大事なことで、それは「幸せ」を感じるということです。しかし、自分勝手な幸せではいけません。「誠実で正直であること」と、そして思いやりを日々持つこと。」そのように法王は述べられています。

この一冊を通して法王の思いを知ることが出来ます。それは、何も難しいことではなく、自分と他者に垣根を作らず平等に扱うことなのです。

◆ 伊藤正法